

トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点

東京大学大学院人文社会系研究科
考古学研究室・常呂実習施設編

2012

東京大学大学院人文社会系研究科

執筆者

今井 千穂	宇田川 洋	熊木 俊朗
坂 絵利	笹田 朋孝	佐藤 孝雄
佐藤 宏之	佐野 雄三	高橋 健
塚本 浩司	増田 隆一	松波 秀法
三野 紀雄	守屋 豊人	山田 哲
山田 悟郎	渡邊 陽子	

パレオ・ラボ AMS 研究グループ

英文要約

高橋 健



1 7a号竖穴 開口部側支柱



2 7a号竖穴 骨塚 a

Front 2



1 8号竖穴



2 10c号竖穴 骨塚c

序

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室が北海道東部の常呂町（現北見市常呂町）で考古学の調査を開始したのは1956（昭和31）年であるが、爾来50有余年にわたって、附属常呂実習施設（1973年～現在）とともに継続的な調査を行ってきた。初期の調査は常呂町域に限らず、知床半島を含む道東沿岸地域を対象としていたが、すぐに常呂町内に調査地域を絞ることになった。以降半世紀にわたって、常呂町内の旧石器時代から縄文時代・続縄文時代・擦文時代・オホーツク時代を経てアイヌ文化期に至る全時代を対象とした考古学調査を営々と継続して行ってきたことになるが、この様な調査がひとつの研究機関で行われてきたことは、世界的に見ても未曾有の試みであると言うことができよう。

1965年に常呂研究室を併設した常呂町郷土資料館が開館し、1967年からは助手1名が常駐する体制となった。1973年に文学部附属北海文化研究常呂実習施設が正式に設置され、現在の准教授1名・助教1名の研究組織が確立し、学生宿舎が整備されたことも相まって、1970年代からは、学術調査であるという性格を維持しながら、学部学生や大学院生の野外実習も兼ねた調査を行ってきた。

調査成果は、調査プロジェクトの節目に際してほぼすべて公開・報告してきた。このことも特筆されるべきことながらであると自負している。『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（上・下）』（1963・1964年）をかきわきに、栄浦第二遺跡・岐阜第二遺跡・ワッカ遺跡等の研究成果を集約した『常呂』（1972年）、続いて『岐阜第三遺跡』（1977年）、『ライトコロ川口遺跡』（1980年）、『栄浦第一遺跡』（1985年）、『ライトコロ右岸遺跡』（1995年）、『トコロチャシ跡遺跡』（2001年）と東京大学から公刊してきた。

本書は、『トコロチャシ跡遺跡』の続編にあたる。トコロチャシ跡遺跡群の調査は、1991年度から2009年度にかけて実施された。このうち1991～1997年に調査したアイヌ文化期のチャシ跡の調査・研究成果については、『トコロチャシ跡遺跡』に報告したので、本書では1998～2005年度に実施したトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点のオホーツク文化の竪穴住居に関する調査研究についてまとめた。これ以外および2006～2009年度の調査成果については、後日別途報告する予定である。

オホーツク文化は、日本列島においては北海道の道北～道東の海岸部にかけてしか見られない特異な古代（5～9世紀）文化として著名である。その生業は海獣・大型魚類・陸獣の狩猟・漁撈に大きく依存し、船形を呈する六角形または五角形的大型住居と、その中に海獣骨や大型魚類・各種の陸獣骨が集積した骨塚を有するといった特徴に代表される特異な文化とも言える。例えば、本書には、道内最大規模の100頭以上のヒグマの頭骨を積み上げた骨塚を有する竪穴住居の報告も含まれている。本書がオホーツク文化研究の進展に大きく寄与することは間違いのないであろう。

なお、トコロチャシ跡遺跡群は、アイヌ文化期のチャシと本書で報告するオホーツク文化期を主体として、国指定「常呂遺跡」に追加指定されており、現在北見市によって史跡整備計画が進行中である。東京大学考古学研究室・常呂実習施設も、史跡整備に伴う事前調査や史跡整備計画の策定等に協力している。数年後に予定されている史跡公園の開園が、今から楽しみである。

本調査の遂行に当たり、旧常呂町、旧常呂町教育委員会、北見市、北見市教育委員会、そして地主であった本田一夫氏の諸機関・諸氏のご協力・ご援助に、末筆ながら深甚の謝意を呈したい。

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室
佐藤 宏之

例言

- 1) 本書は、1998年度～2005年度に東京大学大学院人文社会系研究科および同文学部の考古学研究室・附属北海文化研究常呂実習施設が、北見市（旧・常呂町）教育委員会の全面的な協力のもと、北海道常呂川下流域のトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点でおこなった発掘調査の報告書である。
- 2) 1998年度以降、トコロチャシ跡遺跡群では以下の調査が実施されている。

1998年度～2002年度 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の発掘調査（調査主体：東京大学大学院人文社会系研究科、協力：常呂町教育委員会）

1999年度～2001年度 トコロチャシ跡遺跡群の試掘調査（調査主体：東京大学大学院人文社会系研究科、協力：常呂町教育委員会）

2003年度～2007年度 史跡常呂遺跡整備事業に伴うトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の発掘調査（調査主体：北見市（2005年度まで常呂町）教育委員会、協力：東京大学大学院人文社会系研究科）

2008年度～2009年度 史跡常呂遺跡整備事業に伴うトコロチャシ跡遺跡の発掘調査（調査主体：北見市教育委員会、協力：東京大学大学院人文社会系研究科）

上記の調査のうち、本書で報告するのはトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点にて1998年度～2005年度に実施された、4軒のオホーツク文化竪穴住居跡の発掘調査に関する成果である。本書で扱わなかったトコロチャシ跡遺跡群の試掘調査、2006年度以降の発掘調査、遺構に伴わない出土遺物、調査全体の総括等についてはあらためて報告書を刊行する予定である。

- 3) トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の調査研究にあたっては、以下の助成を受けた。

平成11年度～平成14年度 科学研究補助金基盤研究（B）「居住形態と集落構造からみたオホーツク文化の考古学的研究」（課題番号11410106 研究代表者：宇田川洋）

平成19年度～平成22年度 科学研究費補助金基盤研究（B）「北東アジア史からみた中世アイヌ文化形成過程の考古学的研究」（課題番号19320124 研究代表者：熊木俊朗）

- 4) トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の発掘調査に関しては、すでに以下の概要報告が刊行されている。

宇田川洋・熊木俊朗編 2002 『トコロチャシ跡遺跡群の調査』東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会

宇田川洋・熊木俊朗編 2003 『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設

上記の概要報告と本報告書では内容の一部に重複する点があるが、本書の内容が優先する。

- 5) 遺構・遺物の図化・写真は以下の者が担当した。

遺構実測図：熊木俊朗・山根美紀

土器実測図：熊木俊朗・山根美紀・木村いづみ

石器実測図：山田哲・山田香織

骨角器実測図：高橋健・山根美紀

木製品実測図：早田成志・國木田大・熊木美野里・熊木俊朗

金属器実測図：笹田朋孝

遺構写真：宇田川洋

遺物写真：熊木俊朗・宇田川洋・高橋健・笹田朋孝

- 6) 第一章・第二章の執筆は調査参加者の所見に基づき、報文末尾に氏名を記した者がおこなった。第三章の執筆は各論文の著者による。内容の責任はそれぞれの執筆者が負う。
- 7) 英文要約は高橋健が作成した。
- 8) 本書の編集は熊木俊朗・國木田大がおこなった。

調査参加者

- 1998年：宇田川洋・後藤直・今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・米川裕治・高橋健・石川岳彦・桑原岳仁・秋葉多聞・貝原寛志・三羽克洋・庄田慎矢・関原誉士・高梨芳樹・谷本庄平・土屋香織・中井真木・長谷川泉・山崎真治・塚本浩司・金丸義一・角美弥子・稲垣はるな・高瀬光永・白杵勲
- 1999年：宇田川洋・後藤直・今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・宇田川智大・江原正和・大島隆之・木内智康・小寺智津子・笹田朋孝・穴戸潤岳・椿未来・早田成志・宮崎順一・森本幹彦・熊林佑允・高瀬光永・上奈穂美・涌坂周一・鄭仁盛 (Jung In-Seung)・高橋健・桑原岳仁・塚本浩司・君島俊行・谷本庄平・山崎真治・豊原熙司・松本勝浩
- 2000年：宇田川洋・後藤直・今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・高橋健・桑原岳仁・塚本浩司・早田成志・堤正隆・岡部牧人・木村未和・小井亜津子・近藤康久・近藤優美子・佐藤尚文・高堂貴・高橋大地・中村雄紀・根岸洋・堀智尋・宮森祐子・上奈穂美・角達之助・Валерий Дерюгин
- 2001年：宇田川洋・後藤直・今村啓爾・大貫静夫・熊木俊朗・高橋健・桑原岳仁・塚本浩司・庄田慎也・小寺智津子・笹田朋孝・岡部牧人・石井龍太・斎藤拓弥・酒井友梨佳・坪田茂・所一男・中江民人・初鹿野博之・森川佳喜・高瀬光永・佐藤昌俊・角達之助・佐藤孝雄・佐藤亜紀子・中村裕子
- 2002年：宇田川洋・後藤直・今村啓爾・大貫静夫・熊木俊朗・高橋健・桑原岳仁・塚本浩司・笹田朋孝・岡部牧人・佐藤昌俊・上野梢梨・大木真徳・岡丈太郎・多可政史・辻創介・上奈穂美・松尾曜・高瀬光永・角達之助・白杵勲・梅田広大・嶋影壮憲
- 2003年：宇田川洋・後藤直・今村啓爾・大貫静夫・熊木俊朗・高橋健・笹田朋孝・岡部牧人・根岸洋・庄田慎矢・有松唯・角道亮介・斎藤拓也・玉腰勇氣・中村亜希子・上奈穂美・松尾曜・榊田朋広・Валерий Шубин・Марина Шубина・Дмитрий Шубин
- 2004年：宇田川洋・後藤直・今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之・山田哲・高橋健・榊田朋広・笹田朋孝・

根岸洋・古澤義久・加藤真広・竹ノ内勇太・田中眞司・東二丁順也・前田亜希・前田侑希・森岬子・
山田礼二・和田健・高瀬光永・大坂拓・Marc Verhoeven・Sofie Verhoeven

2005年：宇田川洋・後藤直・今村啓爾・大貫静夫・熊木俊朗・山田哲・高橋健・笹田朋孝・榊田朋広・
角道亮介・金恩榮 (Kim Jae-youn)・中村亜希子・森岬子・池田亮一・石田千郷・大杉千春・
鈴木宏典・鈴木壘・関端一憲・柳原梢子・山岡貴弘・高瀬光永

トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点

目次

序

例言

第一章 調査の経緯	1
第一節 遺跡の概要と調査目的〔熊木俊朗〕	1
第二節 各年度の調査概要〔熊木俊朗・宇田川洋〕	9
第三節 出土資料の掲載について〔熊木俊朗・山田哲・高橋健・笹田朋孝〕	20
第二章 遺構各説	22
第一節 7号竪穴	22
1 竪穴埋土の様相と層序〔熊木俊朗〕	22
2 竪穴住居〔熊木俊朗〕	24
3 遺物〔土器：熊木俊朗、石器：山田哲、骨角器：高橋健、木製品：宇田川洋、 金属器：笹田朋孝〕	45
4 小括〔熊木俊朗〕	89
第二節 8号竪穴	92
1 竪穴埋土の様相と層序〔熊木俊朗〕	92
2 竪穴住居〔熊木俊朗〕	108
3 遺物〔土器：熊木俊朗、石器：山田哲、骨角器：高橋健、木製品：宇田川洋、 金属器：笹田朋孝〕	116
4 小括〔熊木俊朗〕	135
第三節 9号竪穴	137
1 竪穴埋土の様相と層序〔熊木俊朗〕	137
2 竪穴住居〔熊木俊朗〕	139
3 遺物〔土器：熊木俊朗、石器：山田哲、骨角器：高橋健、木製品：宇田川洋、 金属器：笹田朋孝〕	157
4 小括〔熊木俊朗〕	179

第四節	10号竪穴	182
1	竪穴埋土の様相と層序〔熊木俊朗〕	182
2	竪穴住居〔熊木俊朗〕	184
3	遺物〔土器：熊木俊朗、石器：山田哲、骨角器：高橋健、木製品：宇田川洋、 金属器：笹田朋孝〕	205
4	小括〔熊木俊朗〕	228
第五節	出土土器・骨角器属性表	231
第三章	考察	243
第一節	オホーツク文化竪穴住居の「家送り」儀礼について〔佐藤宏之〕	243
第二節	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号竪穴出土の擦文土器（土師器）について —北海道東部の初期段階の擦文土器—〔塚本浩司〕	253
第三節	トコロチャシ跡遺跡の骨角器について〔高橋健〕	271
第四節	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土の鉄器について〔笹田朋孝〕	277
第五節	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土の木製品について〔宇田川洋〕	281
第六節	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の竪穴から検出された植物遺体について 〔山田悟郎・今井千穂〕	284
第七節	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号竪穴から出土した炭化材の樹種同定 〔三野紀雄〕	294
第八節	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点8号・9号・10号竪穴より出土した木質 試料の樹種〔松波秀法・佐野雄三・渡邊陽子・守屋豊人〕	298
第九節	トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号・9号・10号竪穴の脊椎動物遺体 〔佐藤孝雄〕	312

第十節 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土ヒグマ骨のミトコンドリア DNA 分析 〔増田隆一・坂 絵利〕	360
第十一節 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の放射性炭素年代測定 〔パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ〕	367
英文要約	386
写真図版 (PLATES)	
報告書抄録	

第二章 挿図目次

- Fig. 1 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の位置
- Fig. 2 トコロチャシ跡遺跡および同オホーツク地点 遺構全体図
- Fig. 3 7号竪穴平面図
- Fig. 4 7号竪穴土層図・エレベーション図
- Fig. 5 7号竪穴柱穴の深さ
- Fig. 6 7号竪穴床面の炭化材出土状況
- Fig. 7 7号竪穴の変遷過程
- Fig. 8 7号竪穴床面出土土器分布図
- Fig. 9 7号竪穴床面出土石器分布図
- Fig. 10 7号竪穴床面出土遺物分布図（土器・石器以外）
- Fig. 11 7号竪穴床面の遺物等集中箇所
- Fig. 12 7号竪穴床面の微細図 1
- Fig. 13 7号竪穴床面の微細図 2
- Fig. 14 7号竪穴床面の微細図 3
- Fig. 15 7号竪穴床面の微細図 4
- Fig. 16 7号竪穴床面の微細図 5
- Fig. 17 7号竪穴床面の微細図 6
- Fig. 18 7a号竪穴骨塚 a のエレベーション図
- Fig. 19 7号竪穴床面の微細図 7
- Fig. 20 7号竪穴床面の微細図 8
- Fig. 21 7号竪穴床面の微細図 9
- Fig. 22 7a号竪穴床面出土の土器
- Fig. 23 7a号竪穴骨塚 a 出土の土器 1
- Fig. 24 7a号竪穴骨塚 a 出土の土器 2
- Fig. 25 7a号竪穴骨塚 a 出土の土器 3
- Fig. 26 7a号竪穴骨塚 a 出土の土器 4
- Fig. 27 7b号竪穴床面出土の土器 1
- Fig. 28 7b号竪穴床面出土の土器 2
- Fig. 29 7b号竪穴床面出土の土器 3
- Fig. 30 7b号竪穴床面出土の土器 4
- Fig. 31 7b号竪穴骨塚 b 出土の土器 1
- Fig. 32 7b号竪穴骨塚 b 出土の土器 2
- Fig. 33 7号竪穴床面出土の土器 1
- Fig. 34 7号竪穴床面出土の土器 2
- Fig. 35 7号竪穴埋土出土の土器
- Fig. 36 7a号竪穴床面出土の石器
- Fig. 37 7a号竪穴骨塚 a 出土の石器
- Fig. 38 7b号竪穴床面出土の石器 1
- Fig. 39 7b号竪穴床面出土の石器 2
- Fig. 40 7b号竪穴骨塚 b 出土の石器
- Fig. 41 7号竪穴埋土出土の石器 1
- Fig. 42 7号竪穴埋土出土の石器 2
- Fig. 43 7号竪穴出土の骨角器 1
- Fig. 44 7号竪穴出土の骨角器 2
- Fig. 45 7号竪穴出土の骨角器 3
- Fig. 46 7号竪穴出土の骨角器 4
- Fig. 47 7号竪穴出土の骨角器 5
- Fig. 48 7号竪穴出土の骨角器 6
- Fig. 49 7号竪穴出土の骨角器 7
- Fig. 50 7号竪穴出土の骨角器 8
- Fig. 51 7号竪穴出土の木製品 1
- Fig. 52 7号竪穴出土の木製品 2
- Fig. 53 7号竪穴出土の木製品 3
- Fig. 54 7号竪穴出土の木製品 4
- Fig. 55 7号竪穴出土の木製品 5
- Fig. 56 7号竪穴出土の木製品 6
- Fig. 57 7号竪穴出土の木製品 7
- Fig. 58 7号竪穴出土の金属器
- Fig. 59 8号竪穴平面図

- Fig. 60 8号竪穴土層図・エレベーション図
Fig. 61 8号竪穴柱穴の深さ
Fig. 62 8号竪穴床面の炭化材出土状況
Fig. 63 8号竪穴（古段階）平面図
Fig. 64 8号竪穴（古段階）柱穴の深さ
Fig. 65 8号竪穴（古段階）の炭化材等出土状況
Fig. 66 8号竪穴の変遷過程
Fig. 67 8号竪穴床面・住居外出土土器分布図
Fig. 68 8号竪穴床面出土石器分布図
Fig. 69 8号竪穴床面出土遺物分布図（土器・石器以外）
Fig. 70 8号竪穴床面の遺物等集中箇所
Fig. 71 8号竪穴床面の微細図 1
Fig. 72 8号竪穴床面の微細図 2
Fig. 73 8号竪穴床面の微細図 3
Fig. 74 8号竪穴床面の微細図 4
Fig. 75 8号竪穴床面の微細図 5
Fig. 76 8号竪穴床面の微細図 6
Fig. 77 8号竪穴（古段階）の遺物等集中箇所
Fig. 78 8号竪穴（古段階）の微細図
Fig. 79 8号竪穴床面出土の土器 1
Fig. 80 8号竪穴床面出土の土器 2
Fig. 81 8号竪穴床面出土の土器 3
Fig. 82 8号竪穴床面出土の土器 4
Fig. 83 8号竪穴床面出土の土器 5
Fig. 84 8号竪穴床面出土の土器 6
Fig. 85 8号竪穴骨塚出土の土器
Fig. 86 8号竪穴（古段階）出土の土器
Fig. 87 8号竪穴住居外出土の土器
Fig. 88 8号竪穴床面出土の石器 1
Fig. 89 8号竪穴床面出土の石器 2
Fig. 90 8号竪穴骨塚出土の石器
Fig. 91 8号竪穴（古段階）出土の石器
Fig. 92 8号竪穴出土の骨角器 1
Fig. 93 8号竪穴出土の骨角器 2
Fig. 94 8号竪穴出土の木製品 1
Fig. 95 8号竪穴出土の木製品 2
Fig. 96 8号竪穴出土の金属器
Fig. 97 9号竪穴平面図
Fig. 98 9号竪穴土層図・エレベーション図
Fig. 99 9号竪穴柱穴の深さ
Fig. 100 9号竪穴床面の炭化材出土状況
Fig. 101 9号竪穴の変遷過程 1
Fig. 102 9号竪穴の変遷過程 2
Fig. 103 9号竪穴床面・住居外出土土器分布図
Fig. 104 9号竪穴床面出土石器分布図
Fig. 105 9号竪穴床面出土遺物分布図（土器・石器以外）
Fig. 106 9号竪穴床面の遺物等集中箇所
Fig. 107 9号竪穴床面の微細図 1
Fig. 108 9号竪穴床面の微細図 2
Fig. 109 9号竪穴床面の微細図 3
Fig. 110 9a号竪穴床面出土の土器
Fig. 111 9a号竪穴骨塚 a 出土の土器
Fig. 112 9a号ないし 9b号竪穴床面出土の土器
Fig. 113 9b号竪穴床面出土の土器
Fig. 114 9c号竪穴床面出土の土器 1
Fig. 115 9c号竪穴床面出土の土器 2
Fig. 116 9c号竪穴床面出土の土器 3
Fig. 117 9c号竪穴骨塚 c 出土の土器 1
Fig. 118 9c号竪穴骨塚 c 出土の土器 2
Fig. 119 9号竪穴床面出土の土器
Fig. 120 9号竪穴住居外出土の土器
Fig. 121 9a号竪穴床面出土の石器
Fig. 122 9a号竪穴骨塚 a 出土の石器

- Fig. 123 9c 号竪穴床面出土の石器
Fig. 124 9c 号竪穴骨塚 c 出土の石器
Fig. 125 9 号竪穴埋土出土の石器
Fig. 126 9 号竪穴出土の骨角器
Fig. 127 9 号竪穴出土の木製品
Fig. 128 9 号竪穴出土の金属器
Fig. 129 10 号竪穴平面図
Fig. 130 10 号竪穴土層図・エレベーション図
Fig. 131 10 号竪穴柱穴の深さ
Fig. 132 10 号竪穴床面の炭化材出土状況
Fig. 133 10 号竪穴の変遷過程 1
Fig. 134 10 号竪穴の変遷過程 2
Fig. 135 10 号竪穴床面出土土器分布図
Fig. 136 10 号竪穴床面出土石器分布図
Fig. 137 10 号竪穴床面出土遺物分布図（土器・石器以外）
Fig. 138 10 号竪穴床面の遺物集中箇所
Fig. 139 10 号竪穴床面の微細図 1
Fig. 140 10 号竪穴床面の微細図 2
Fig. 141 10 号竪穴床面の微細図 3
Fig. 142 10 号竪穴床面の微細図 4
Fig. 143 10 号竪穴床面の微細図 5
Fig. 144 10 号竪穴床面の微細図 6
Fig. 145 10 号竪穴床面の微細図 7
Fig. 146 10 号竪穴床面の微細図 8
Fig. 147 10a 号竪穴床面出土の土器 1
Fig. 148 10a 号竪穴床面出土の土器 2
Fig. 149 10a 号竪穴骨塚 a 出土の土器
Fig. 150 10b 号竪穴床面出土の土器 1
Fig. 151 10b 号竪穴床面出土の土器 2
Fig. 152 10b 号竪穴床面出土の土器 3
Fig. 153 10c 号竪穴床面出土の土器 1
Fig. 154 10c 号竪穴床面出土の土器 2
Fig. 155 10c 号竪穴床面出土の土器 3
Fig. 156 10c 号竪穴骨塚 c 出土の土器 1
Fig. 157 10c 号竪穴骨塚 c 出土の土器 2
Fig. 158 10a 号竪穴床面出土の石器
Fig. 159 10a 号竪穴骨塚 a 出土の石器
Fig. 160 10b 号竪穴床面出土の石器 1
Fig. 161 10b 号竪穴床面出土の石器 2
Fig. 162 10c 号竪穴床面出土の石器 1
Fig. 163 10c 号竪穴床面出土の石器 2
Fig. 164 10c 号竪穴床面出土の石器 3
Fig. 165 10c 号竪穴骨塚 c 出土の石器
Fig. 166 10 号竪穴埋土出土の石器
Fig. 167 10 号竪穴出土の骨角器
Fig. 168 10 号竪穴出土の木製品
Fig. 169 10 号竪穴出土の金属器

図版目次

Front 1

- 1 7a号竪穴 開口部側主柱
- 2 7a号竪穴 骨塚 a

Front 2

- 1 8号竪穴
- 2 10c号竪穴 骨塚 c

PL.1 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点

- 1 遠景（北方から撮影）
- 2 遠景（真上から、画面上が北西方向）

PL.2 7号竪穴

- 1 7a号竪穴 開口部側主柱付近
- 2 7a号竪穴 開口部側主柱西側の壁材

PL.3 7号竪穴

- 1 7a号竪穴 開口部側主柱
- 2 7a号竪穴 鯨骨製骨器出土状況

PL.4 7号竪穴

- 1 7a号竪穴 壁際板材出土状況
- 2 7a号竪穴 壁際板材下層 木製品出土状況

PL.5 7号竪穴

- 1 7a号竪穴 骨塚 a
- 2 7a号竪穴 骨塚 a 最下層

PL.6 7号竪穴

- 1 7b号竪穴 壁際炭化材列
- 2 7b号竪穴 木製品出土状況

PL.7 7号竪穴

- 1 7b号竪穴 土器出土状況
- 2 7号竪穴 炉 a・炉 b

PL.8 7号竪穴

- 1 7b号竪穴 骨塚 b
- 2 7号竪穴

PL.9 7号竪穴出土土器

PL.10 7号竪穴出土土器

PL.11 7号竪穴出土土器

PL.12 7号竪穴出土土器

PL.13 7号竪穴出土土器

PL.14 7号竪穴出土土器

PL.15 7号竪穴出土石器・金属器

PL.16 7号竪穴出土骨角器

PL.17 7号竪穴出土骨角器

PL.18 7号竪穴出土骨角器

PL.19 7号竪穴出土骨角器

PL.20 7号竪穴出土木製品

PL.21 7号竪穴出土木製品

PL.22 7号竪穴出土木製品

PL.23 8号竪穴

1 8号竪穴 壁際炭化材列

2 8号竪穴 壁際炭化材列

PL.24 8号竪穴

1 8号竪穴 壁際炭化材列近景

2 8号竪穴 壁際炭化材列近景

PL.25 8号竪穴

1 8号竪穴 骨塚（主要部分）

2 8号竪穴 骨塚（近景）

PL.26 8号竪穴

1 8号竪穴 骨塚（全景）

2 8号竪穴 小骨塚

PL.27 8号竪穴

1 8号竪穴（古段階） 礫群出土状況

2 8号竪穴（古段階）ピット内炭化材出土状況

PL.28 8号竪穴出土土器・石器

- PL.29 8号竪穴出土石器・金属器
- PL.30 8号竪穴出土骨角器
- PL.31 8号竪穴出土木製品
- PL.32 9号竪穴
- 1 9a号竪穴 骨集中
 - 2 9a号竪穴 骨塚 a
- PL.33 9号竪穴
- 1 9b号竪穴 壁際炭化材列
 - 2 9c号竪穴 壁際炭化材列
- PL.34 9号竪穴
- 1 9c号竪穴 礫群出土状況
 - 2 9号竪穴 炉 c
- PL.35 9号竪穴
- 1 9号竪穴 骨塚 c (全景)
 - 2 9号竪穴 骨塚 c 最下層
- PL.36 9号竪穴
- 1 9号竪穴 開口部側主柱の東側ピット群
 - 2 9号竪穴
- PL.37 9号竪穴出土土器
- PL.38 9号竪穴出土石器
- PL.39 9号竪穴出土石器・金属器
- PL.40 9号竪穴出土骨角器
- PL.41 10号竪穴
- 1 10a号竪穴 骨塚 a (西側)
 - 2 10a号竪穴 骨塚 a (東側)
- PL.42 10号竪穴
- 1 10a号竪穴 土器出土状況
 - 2 10a号竪穴 遺物出土状況
- PL.43 10号竪穴
- 1 10c号竪穴 遺物出土状況
 - 2 10c号竪穴 礫群等出土状況
- PL.44 10号竪穴
- 1 10号竪穴 炉 c
 - 2 10号竪穴 壁際炭化材列 (10c号)
- PL.45 10号竪穴
- 1 10号竪穴 壁際炭化材列 (10a号・10c号)
 - 2 10号竪穴 壁際炭化材列 (10a号・10c号)
- PL.46 10号竪穴
- 1 10号竪穴 壁際炭化材列 (10c号)
 - 2 10号竪穴
- PL.47 10号竪穴出土土器
- PL.48 10号竪穴出土土器
- PL.49 10号竪穴出土土器
- PL.50 10号竪穴出土土器
- PL.51 10号竪穴出土石器
- PL.52 10号竪穴出土石器
- PL.53 10号竪穴出土石器・骨角器・金属器
- PL.54 トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点から出土した植物遺体 1
- PL.55 トコロチャシ跡遺跡 オホーツク地点から出土した植物遺体 2
- PL.56 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土木質試料各樹種の SEM 写真 1
- PL.57 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土木質試料各樹種の SEM 写真 2
- PL.58 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土木質試料各樹種の SEM 写真 3
- PL.59 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土木質試料各樹種の SEM 写真 4
- PL.60 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土木質試料各樹種の SEM 写真 5
- PL.61 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点出土木質試料各樹種の SEM 写真 6
- PL.62 7a号竪穴骨塚 a 出土ヒグマ頭蓋骨・下顎骨
- PL.63 7a号竪穴骨塚 a 出土エゾシカ頭蓋骨・下顎骨
- PL.64-1 7a号竪穴骨塚 a 出土小型陸獣頭蓋骨・

下顎骨

PL.64-2 7a 号竖穴骨塚 a 出土シマフクロウ遺体

第一章 調査の経緯

第一節 遺跡の概要と調査目的

1 遺跡の概要と調査史

トコロチャシ跡遺跡群は、大雪山系に源をもちオホーツク海に注ぐ常呂川の河口付近の右岸段丘上に位置している遺跡である (Fig.1)。地番は、北見市常呂町字常呂 106 番 2、106 番 3、108 番 1～3、109 番 1、109 番 2、109 番 4、110 番、111 番 1、111 番 2、112 番 1、112 番 2、113 番、116 番 1、116 番 2、117 番 1、118 番 1 であり、通称「弁天」地区の一部に相当し、現在は北見市の所有地となっている。当遺跡が立地する段丘は標高 18m～30 m ほどであり、下位の常呂川付近との比高は約 13 m ほどである。この遺跡群は段丘平坦面のほぼ全面に広がっているが、特に段丘の周縁には遺構密度の高い地点が 3 箇所あり、それらは北から順にトコロチャシ跡遺跡、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点、トコロチャシ南尾根遺跡と呼称されている。各地点の概要は以下のとおりである。

トコロチャシ跡遺跡 (Fig.2) は、古くからアイヌの砦跡として知られており、斜里アイヌと戦った伝承も残されている。すなわち、考古学上のアイヌ文化期に属する遺跡といえる。発掘調査は東京大学文学部考古学研究室によって行われており (駒井編 1964、東京大学東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2001)、ここではアイヌ文化期の遺構・遺物に加え、縄文文化早期 (微量)、縄文前期・中期 (やや多量)、縄文後期・晩期 (微量)、続縄文文化期 (多量)、擦文文化期 (微量)、オホーツク文化期 (多量) の遺物も出土している。故に、本遺跡は縄文早期からアイヌ文化期に至るまで、粗密の差はあれ、継続的に永年にわたって利用されていたと理解できる。

さらにこの遺跡を特徴づけるものは、オホーツク文化の竪穴住居跡群の存在である。本遺跡の L 字形に掘られたチャシの壕の内部、すなわちチャシの主体部内には 2 軒のオホーツク文化の竪穴 (1 号、2 号住居跡) が窪みとして残存していた。それらは 1960 年度および 1963 年度に発掘調査されており、すでに『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』 (駒井編 1964) の中で報告されている。さらに、その際の調査ではチャシの一部もトレンチ方式によって発掘されており、トレンチ内で検出されたオホーツク文化の竪穴 (後述の 4 号と 6 号に相当) との新旧関係も把握されている。ちなみに、1960 年度は 1 号竪穴と V、V、U、IX、T、S の各トレンチを、1963 年度は 2 号竪穴およびその周辺と VII トレンチを調査している。

1991 年度～1997 年度にはチャシ跡の壕と壕に囲まれたチャシ跡主体部の調査を行い、隣接土地所有者の建物があって調査できなかった東北部を除き、チャシ跡をほぼ完掘した。なお、その調査時にオホーツク文化期と考えられる竪穴住居跡の一部が複数検出されており、それらは 3 号～6 号竪穴と命名され

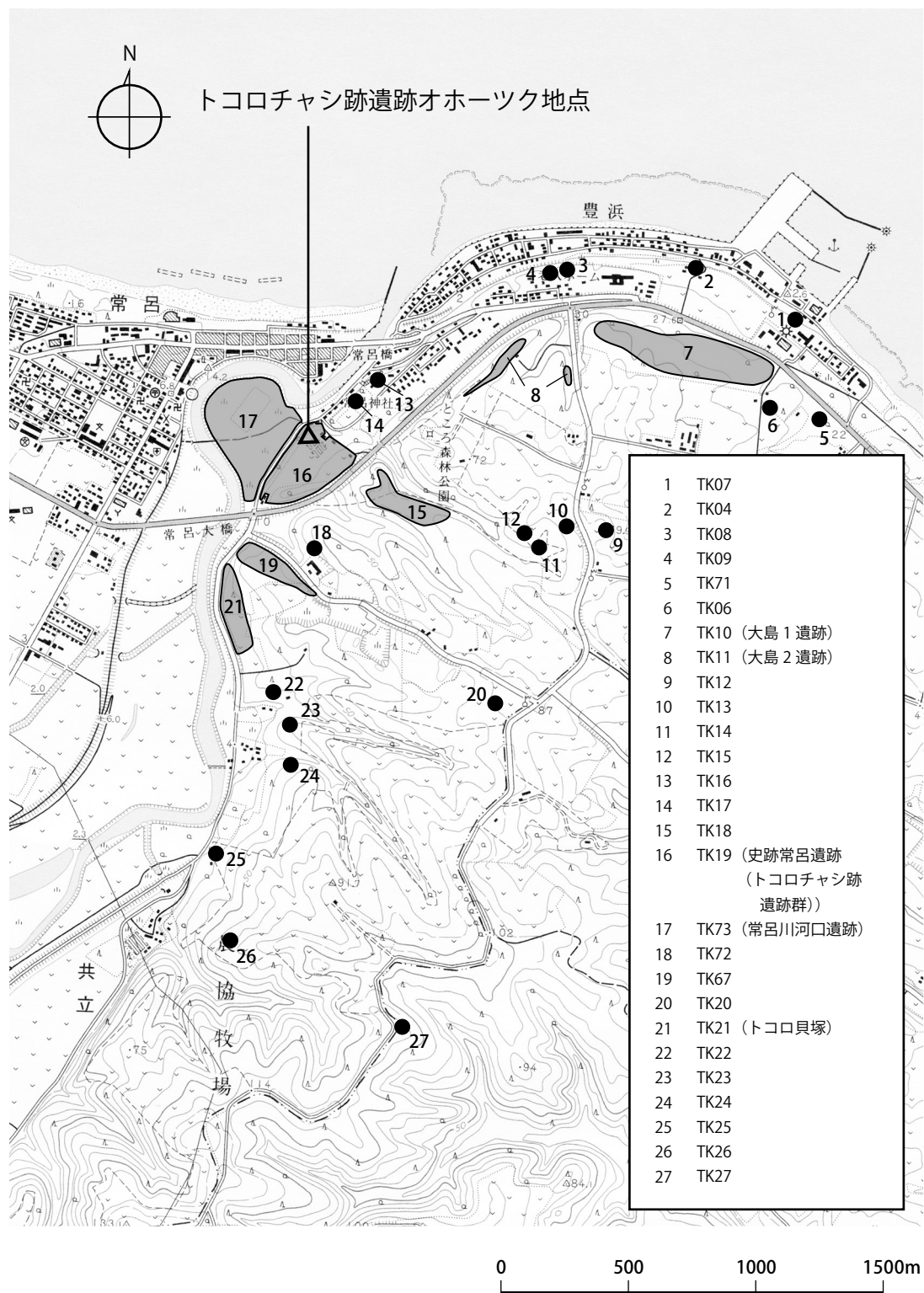


Fig. 1 トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の位置

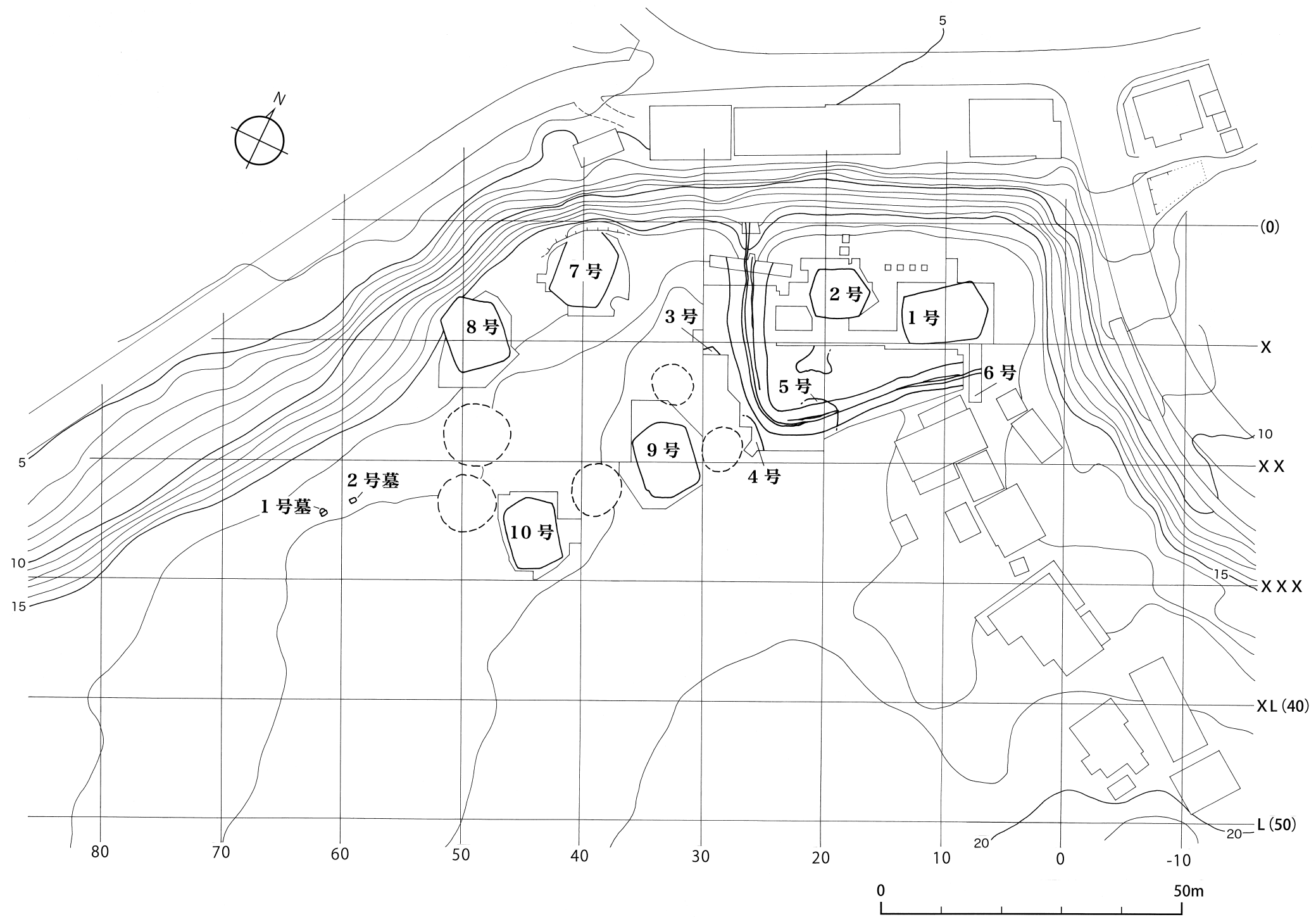


Fig. 2 トコロチャシ跡遺跡および同オホーツク地点 遺構全体図

た。この調査結果については『トコロチャシ跡遺跡』（東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2001）に報告されている。

トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点は、チャシ跡の南西側に隣接する、オホーツク文化の竪穴住居跡とみられる大型の窪み群が残されていた一帯を指す（Fig.2）。この地点名称は今回の調査に際し、過去の調査地点（1号・2号竪穴）とこの一帯とを区別するために、新たに設定したものである。1960年度および1963年度の地形測量時には、ここに合計9基の窪みが確認されていたようだが（駒井編 1964：Fig.5）、その後、窪みの多くは耕作等による削平や盛土によって平坦化され、今回の調査開始時には西側の崖際の2基（後述の7号と8号）のみが目視で窪みを確認できる状態であった。本地点に関しては、これまでに付近一帯で遺物の発見が報じられたことはあるが（畠山 1969、藤本・宇田川 1989、右代 1990、宇田川・熊木編 2003）、発掘調査が行われたことはなく、今回の調査が初の本格的調査となる。

トコロチャシ南尾根遺跡は段丘の南斜面側に位置しており、1960年には東京大学によって32軒の竪穴の窪みが確認されていた（駒井編 1964）。その後、1964年度には東京大学文学部考古学研究室による学術調査、1974年度・1975年度には常呂町による国道238号線バイパス建設のための緊急調査、1985年度には常呂町教育委員会による住宅建設工事に伴う緊急調査が行われ、縄文時代早期から擦文時代にわたる19軒の竪穴住居跡とピット群等が調査されている。その成果は『常呂』（東京大学文学部考古学研究室編 1972）、『トコロチャシ南尾根遺跡』（藤本編 1976）、『トコロチャシ南尾根遺跡-1985年度-』（武田編 1986）の各報告書に記載されている。

2 調査目的

東京大学考古学研究室・常呂実習施設では、これまで半世紀以上にわたって常呂川下流域において考古学的調査を継続してきた。近年の調査についてみると、1970年代後半～1980年代にかけては続縄文文化と擦文文化の集落、1990年代にはアイヌ文化のチャシ跡を主な対象とし、小規模ながら時間をかけて1つの集落やチャシ跡を全掘するという方針で、成果を蓄積してきた。

1997年度にトコロチャシ跡遺跡の発掘調査が終了した後、そのような蓄積を踏まえて我々が新たな調査対象に選択したのは、オホーツク文化の集落であった。大きな理由は、1967年度～1969年度の栄浦第二遺跡の調査以来手がけてこなかったオホーツク文化の調査を実施することにより、続縄文文化からアイヌ文化の成立に至るこの地域の文化の変遷過程を、連続するかたちで再評価するという点にあった。また、本調査の少し前に、常呂町教育委員会による栄浦第二遺跡や常呂川河口遺跡の工事事前調査でオホーツク文化の竪穴住居や土坑墓が検出されたことによって（武田編 1995、武田編 1996）、この地域のオホーツク文化の遺跡間の関係や集落の構造について注目すべき検討材料が増えていたことも、オホーツク文化の調査を計画する動機となった。そこで具体的な調査対象として選択されたのが、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の竪穴群である。本地点を選んだ主な理由は、これまで未調査で竪穴の詳細な時期や内容が不明であったことや、竪穴の密度が高く集落としてまとまっており、時間をかけて1

第一章 調査の経緯

つの集落の全容を解明するというこれまでの我々の調査方針を実現しやすいと思われたところにあった。

調査は1998年度より開始されたが、これはトコロチャシ跡遺跡の1960年度と1963年度の調査を第1次・第2次、1991年度～1997年度の調査を第3次～第9次調査とすると、第10次の調査に相当する。初年度の調査は各部学生・大学院生の考古学実習（野外考古学）を兼ねた例年同様の調査であったが、1999年度から2002年度にかけては科学研究費補助金（基盤研究（B））を受け、研究課題「居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究」（研究代表者：宇田川洋）として調査を継続した（オホーツク文化7号・8号・9号竪穴）。この科研費による調査の成果は、『トコロチャシ跡遺跡群の調査』（宇田川・熊木編2002）として報告書を刊行しており、本書の内容の一部についても概報として公表している。

また、1999年度からは本調査と併行して、旧常呂町（現在は北見市）によるトコロチャシ跡遺跡群の史跡整備事業にも協力し、それと関連して科学研究費補助金（地域連携推進研究費）を1999年度～2001年度に受け、研究課題「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査研究」（研究代表者：宇田川洋）を実施した。この研究課題では竪穴の調査とは別に、史跡整備のための詳細分布調査などの調査研究を行ったが、それらの成果についても『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』（宇田川・熊木編2003）として報告書を刊行しており、そこでも本書の内容の一部を概報として公表している。

以上の経緯を踏まえて、2002年6月、トコロチャシ跡遺跡・トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点・トコロチャシ南尾根遺跡を含むトコロチャシ跡遺跡群の65,637㎡の地域が、史跡常呂遺跡の追加指定となる提案が文化庁文化審議会文化財部会を通過し、文部科学省に答申して同年9月20日に告示されている。この追加指定を受けて、2003年度以降、調査の目的と体制は旧常呂町（現北見市）が主導する史跡整備に伴う発掘調査へと変更され、東京大学がそれに協力するかたちとなった。この史跡整備に伴う調査は2003年度～2007年度にはトコロチャシ跡遺跡オホーツク地点、2008年度～2009年度にはトコロチャシ跡遺跡で実施されており、前者の調査ではオホーツク文化の竪穴（10号）の調査と同文化の墓域特定のための分布調査が、後者ではチャシの塚の未発掘部分を対象とした分布調査が主に行われている。

本報告書では、これら1998年度～2009年度にわたって行われた一連のトコロチャシ跡遺跡群における調査のうち、1998年度～2005年度に実施された、オホーツク文化の7・8・9・10号の4軒の竪穴の調査について成果を報告する。竪穴以外の調査部分、すなわち詳細分布調査やチャシの塚に関する調査等については、後日、あらためて報告書を刊行する予定である。

3 調査区と基本層序

オホーツク地点の発掘調査区を設定するにあたっては、過去のトコロチャシ跡遺跡の調査で用いられた調査グリッドを踏襲し、これを拡張して用いることとした。グリッドの名称は、東側から西側に1

～52まで、北側から南側にはI～XX（Iより北のグリッド・ラインは北に向かってA→F）というように与えられている（Fig.2）。実際の測量の際に基準としたのは、1991年度に埋設された3箇所のコンクリート杭、X-6、X-18、X-31である。これらを基準として本調査では1998年度にX-52のコンクリート杭を新たに埋設し、基準の1つに加えている。以上のグリッドの国土座標系（第13系）の値については藤本強が1991年度に測量しており、それによると平面直角座標系の値はX-6：X(N-S)=13015.09・Y(E-W)=-13438.51、X-31：X=12994.45・Y=-13484.05で、グリッドの方位は、真北から東に65°36'49"振れた方向がグリッドのローマ数字方向（南北）のラインになると確認されている（藤本2001）。これを日本測地系2000（世界測地系）に変換した値は、X-6がN44°07'10.02153"・E144°04'41.20220"、X-31がN44°07'09.34968"・E144°04'39.15580"となる（Web版TKY2JGD Ver.1.3.79パラメータ Ver.2.1.1を使用）。

トコロチャン跡遺跡群全体の基本層序については、1999年度～2001年度にかけて行われた遺跡群全体の分布調査の際に、以下のような堆積状況が確認されている（宇田川・熊木編2002：35）。

I層：表土もしくは耕作土。耕作土の場合、II層以下の土層がブロック状や粒状に混入しているところもある。

II層：暗褐色土。I層とIII層の漸移層。しまりはIII層よりも弱い。

III層：茶褐色粘土。いわゆるローム層。II層との層界は明瞭ではない。しまりが強い。

IV層：黄褐色粘土。いわゆるローム層。目立った（粗粒の）スコリアやパミスは含まれない。III層同様にしまりは強いが、粘性はやや弱い。

オホーツク地点の基本層序も、竪穴外の土層についてはこれとほぼ同様の堆積状況が確認されているが、本調査の主な対象となった竪穴内の埋土については、ある意味当然だが上記の基本層序とは堆積の様相が異なっていた。しかし各竪穴間で埋土の土層を比較すると、細部では異なる点が多いものの概ね共通する様相が確認された。よって本調査では、発掘や整理作業をわかりやすく進めるため、竪穴内埋土の基本層序として以下のようにまとめることにした。

竪穴内I層：黒色土。表土もしくは耕作土で、植物の根と腐葉を多く含み、土のしまりが悪い。

竪穴内II層：黒褐色土。植物の根と腐葉、砂を含み、土のしまりがやや悪い。

竪穴内III層：暗褐色土。砂と炭化物を含む。

竪穴内IV層：III層より色調がやや明るい暗褐色土。砂、炭化物、黄褐色粘土粒、焼土粒、骨片等を含む。

以下の記述で使用する「基本層序」や「I層」などの名称は、特に断りのない限りこれら竪穴内埋土の基本層序を指すこととする。

（熊木俊朗・宇田川洋）

引用文献

右代啓視 1990 「北海道常呂町出土のオホーツク式土器－加藤正コレクション－」『北海道開拓記念館調査報告』

第一章 調査の経緯

- 宇田川洋・熊木俊朗編 2002 『トコロチャシ跡遺跡群の調査』東京大学大学院人文社会系研究科・常呂町教育委員会
- 宇田川洋・熊木俊朗編 2003 『居住形態と集落構造から見たオホーツク文化の考古学的研究』東京大学常呂実習施設
- 駒井和愛編 1964 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 下巻』東京大学文学部
- 武田 修編 1986 『トコロチャシ南尾根遺跡-1985年度-』常呂町教育委員会
- 武田 修編 1995 『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会
- 武田 修編 1996 『常呂川河口遺跡(1)』常呂町教育委員会
- 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編 2001 『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科
- 東京大学文学部考古学研究室編 1972 『常呂』東京大学文学部
- 畠山三郎太 1969 「考古ニュース・常呂町から鉄鏃発見」『考古学ジャーナル』33:35
- 藤本 強 「第一章第三節 トコロチャシ跡遺跡における国土座標系」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科:17-19
- 藤本 強編 1976 『トコロチャシ南尾根遺跡』北海道常呂町
- 藤本 強・宇田川洋 1989 「第1章第4節 遺跡・遺物からみた常呂」『常呂町百年史』北海道常呂町:122-143

第二節 各年度の調査概要

1998年度

初年度の調査は、チャシ跡の壕（V～XⅧ-8～29区）の西側に展開する竪穴群の中で、現況の窪み上もっとも規模の大きい7号竪穴を対象とした（I～Ⅶ-36～43区）。発掘調査面積は予定の200㎡よりも少なく150㎡であったが、後述する理由により住居跡床面直上にて調査を中断して埋め戻しを行ったため、本年度の調査終了面積は0㎡である。

調査は、X-31杭とX-52杭を利用して、トランシットを使った杭打ちから始めた。そして竪穴の窪みに2本（それぞれ39ライン・40ラインより50cm東のグリッドに平行する南北ライン）の土層堆積観察用のベルトを設定し、ベルト沿いにサブ・トレンチを設定して掘り下げることから開始した。サブ・トレンチ内では前述の竪穴内I～Ⅳ層の基本層序が確認された。調査地点の発掘前の現況が林であるため、I層の表土層およびⅡ層の黒褐色土層の一部は木の根が密集した層をなしていた。なおⅡ層の黒褐色土層は、竪穴の南側では竪穴壁の外側にも連続しているが、他の方向では基本的には住居跡内に収まるようである。サブ・トレンチ内にて観察された竪穴住居跡の壁の位置を考慮して、南端の発掘区はⅧラインに、東側発掘区端は36ラインに設定したが、南東と南西隅および北西には立木があったため、その内側を回り込む形で発掘区を設定した。そのため、住居跡北西の一部の検出は不可能となった。また西側の発掘区端は、隣接する別の遺構が存在する可能性を考慮して範囲を設定した。表土層除去と平行して、隣接する竪穴の窪みを含めた周辺の地形測量を実施した。

サブ・トレンチ内の土層観察の結果に基づいて、I層から炭化物・焼土等の散在するⅣ層上面まで、順次層序に従って慎重に掘り下げを行った。I層およびⅡ層からは、土器片・石器・骨角器・動物骨片等が出土しているが、量的には比較的少なかった。土器片は、オホーツク文化期を中心に縄文（前期・中期、少量）、続縄文（少量）、擦文（極少量）の各期のものが出土した。石器類の帰属時期は不明のものが多く、確実にオホーツク文化期といえるものは少なかった。

Ⅲ-39～40区のⅡ層中位から、長径70cm、短径50cm、深さ15cmほどの長円形を呈する焼土跡が2ヶ所まとまって検出されている。焼土跡内縁部および覆土下半部は赤褐色の焼土が充填されており、その内部および上部は黄褐色の灰白色の灰層によって構成されていた。時期を特定可能な共伴遺物がないため判然としないが、同層準付近に樽前a（Ta-a、1739年降灰）とみられる白色の火山灰がわずかに見られたことから、この時期に近接した時期かまたはそれ以降と考えられよう。

また、発掘区西側にて住居跡の範囲を探索中に、近接した位置から黒褐色土を覆土にもつ別の遺構らしき痕跡を検出した（Ⅱ～Ⅳ-42・43区）。これについては調査を行わなかったため詳細は不明だが、検出時に出土した土器片の多くが続縄文期（宇津内式、後北式、北大式等）に属するため、この時期のものかもしれない。

Ⅲ層を掘り下げるにつれて遺物量は増加した。同時に壁面と住居形態の確認を行った。長軸方向が当

第一章 調査の経緯

初の予測とは異なっていたために、土層観察用の2本の南北ベルトのうちの東側が住居跡東側に偏ることが判明し、除去することにした。

もともと現況で中央部分が低い窪地を呈していたため、床面に到達したのも中央付近が最初であった。広範囲に広がる貼床を手がかりに、中央付近から壁際に向かって床面の検出を進めた結果、貼床と壁の間に広い範囲で炭化材の分布が認められた。炭化材の分布は基本的に全周にある。保存の良好なところでは、壁際より30cm程度内側に1列あり、さらに1m内外離れた内側に外側と平行する第2の炭化材列が確認された。特に外側の炭化材列は遺存状況が良好で、未焼成部分もかなり認められた。この未焼成部分にはカンバ類と推定される樹皮材が組織的に敷き詰められ、その下に横位に連なる炭化材または縦位に密接した炭化丸太材を確認することができる。さらに横位に連なる炭化板材の外側（下側）には支柱と思われる縦位の丸太材が等間隔に確認できる部分もある。この樹皮材構造体の2ヶ所で、微細分布図を作成した。

貼床を中心とした床面直上からは、多様な遺物が出土した。主な遺物・遺構には、完形に復元可能なオホーツク文化貼付文期の深鉢形土器、クジラ・海獣類の肩甲骨や獣骨の集積、骨塚、灰層、石錘・骨斧・銚先等の石器・骨角器類等がある。骨塚は、長軸方向南側付近の壁際より検出された。

こうした検出状況からみて、本住居跡は焼失住居である可能性が高く、特に炭化材の調査に時間をかける必要が生じた。そのため、炭化材を調査した後に調査されるべき床面以下の調査に至る調査時間が本年度は確保できないと判断し、今次調査では、中央付近での床面の確認とその外側での炭化材の確認で調査を中断した。骨塚・炭化材・樹皮材構造体等の養生を行った後、シートで全面を覆い、その上から調査時の排土をかけて封鎖し、次年度に調査を継続することとした。

1999年度

今年度はトータル・ステーションによる遺物の取り上げを実施することにしたため、X-31とX-52の基準杭からX-44杭を確認した上でIV-44杭を決定し、それを遺物取り上げの原点とした。杭打ちと並行して昨年度の保護シートを撤去する作業を行った。

昨年度の調査で、東西方向（IVラインより1m南側）と南北方向（40ラインより西側に50cm）に土層観察用のセクション・ラインを設定しておいた。竪穴内の基本層序は先述のI層からIV層までであるが、床面直上まで調査を進めながら土層堆積の状況を再度確認したところ、このIV層下部に骨片を混入する土層や灰層、炭化層等を挟んで床面に至るといった個所も認められた。

昨年より一部が確認されていた住居の壁に平行する2列の炭化材列の検出には時間を要した。また貼床がかなり検出された段階で、ヘリコプターによる空中撮影を実施した。各炭化材列が清掃された段階で、随時写真測量も行っている。骨塚も同様に写真測量を実施した。床面近くまでの土層断面図は昨年のうちに作成しておいたが、セクション・ベルトの下部は残しておいたので、随時土層断面図を追加しつつ、ベルトの除去作業も行った。

炭化材列の中でも、北隅の主柱は直径10cm前後の丸太材が7本ほどまとめられてあり、しかもそれ

らを樹皮で取り巻いている状況が観察されたのは圧巻であった（口絵 Front1-1、PL.2-1）。長いもので床上に 50cm ほど立っていた。その支柱から西側には、北西壁（より北側の崖との関係で壁を完全に出すことはできなかったが）に沿う形で径 8cm ～ 10cm の丸太材が 10 本並んで確認されている。それらは床面に立っていた状況で検出されたが、上部は途中で折れて竪穴内部に見事に倒れこんでいた。これらの上面には樹皮が何枚も重ねられており、壁材としてのこのような丸太材あるいは板材を壁土から保護する目的と考えられた（PL.2-2）。

さらに、主に西壁沿いの炭化材列で確認されたことであるが、竪穴外部から内部にかけて表面を外側に向けた樹皮の内側に板材（厚さ 3cm ほど）を縦方向に立て、さらにその内側の根元には角材もしくは丸太材を横に置いて、その内側に丸太の立柱で支えていた様子が各所で確認されている。また、その角材の上部に横幅のある厚さ 4cm ほどの板材を乗せている部分も認められた。そのようなところではその横板の下に木製品が集中して出土するという状況も把握できた（PL.4-2）。あたかもベッド状のものが存在し、その下の空間を物置場として利用していた感がある。とくに西側外壁の南西隅に近い部分にそれが顕著であった。同様の木製品の集中箇所は、北東壁の内側炭化材列内にも認められたが、ここではベッド状横板は明確には検出されていない。

立柱は丸太の炭化材として遺存していたが、支柱は前出の北隅の場合と同様に、何本かの丸太材の集合からなっており、柱穴はそれらをまとめて入れる大きなピットであった（PL.3-1）。ほかに 2 本単位の丸太柱を構成するものが所々で認められている。これらの炭化材は樹種調査のため、各所のものをトータル・ステーションで取り上げておいた。

貼床は、焼失住居ということもあって真赤に焼けて煉瓦状になっていたが、調査の過程で一応 3 枚に分けて呼んでおいた。それは重複住居であることが想定されたからで、南から 7a、7b、7c 貼床と仮称した。それらと貼床をめぐる周溝の切り合い関係から、結果的には、仮称 7a と 7b 貼床（Fig.3 の 7 号貼床 a）は同一時期のものと判断でき、それらの高さは同一レベルである一方、仮称 7c 貼床（Fig.3 の 7 号貼床 b）は若干それらより高いレベルで検出され、仮称 7c 貼床の方が仮称 7a・7b 貼床より新しいことが最終的に理解できた。貼床の南側を取り巻く周溝はクロスする形で 2 本認められたが、それは仮称 7c 貼床の時期に、竪穴の南壁の修復を行ったことを意味していると判断できた。以上の点から、7 号竪穴は基本的に 2 回の建て替え（入れ子状の縮小）が行われたと最終的に判断された。本報告書の遺構各節の説明の中では、仮称 7a・7b 貼床の段階を 7a 号竪穴とし、仮称 7c 貼床の段階を 7b 号竪穴として報告している。また、仮称 7c 貼床の段階において確認された竪穴の南壁の修復に関しては、7b' 号竪穴として扱っている。

炉跡は、住居跡のほぼ中央部、貼床の内部の位置に約 1m×4m の範囲で検出されている。中央に石組みの痕跡が残っていた（Fig.3 の炉 a）ほか、その南北に炭化材で長方形に囲まれた炉跡が 3 ヶ所確認された（Fig.3 の炉 b）（PL.7-2）。

骨塚は、仮称 7a 貼床の南隅と仮称 7c 貼床の南隅の 2 ヶ所で検出されている。両方とも写真測量を行い、特に仮称 7a 貼床に伴う骨塚（PL.5-1 ～ 2）については、上面と、それを取り除いていった本体部

第一章 調査の経緯

の、2回の測量を行っている。動物遺存体の取り上げに関しては、全点ドットと作図は困難であるので、50cmメッシュ毎で全点の取り上げを行い、残った土も3mmメッシュの篩にかけて遺物の採集に努めた。なお、骨塚部分の下の床面については、フローテーション分析のための土壌サンプルを採集しておいた。最後にヘリコプターによる空中写真撮影と、写真測量用の撮影を実施し、7号竪穴の調査は終了した。

2000年度

本年度からは7号竪穴の南西に隣接する8号竪穴を発掘の対象にしている。今回の調査も学生・院生の考古学実習を兼ねた学術調査である。

今年度もトータル・ステーションによる遺物の取り上げを行うことにしたため、X-52杭を原点としてX-42杭を設定し、その方向をX軸、直行する方向をY軸とし、それらを遺物取り上げの座標とした。本竪穴をカバーする杭打ちは、52ライン～46ラインとVIライン～XIVラインに囲まれる範囲に設定した。

十字形のセクション・ラインは、7号竪穴と長軸方向が同じであろうと推定して、グリッドに平行するものとはせずXIV-50杭とVIII-48杭を結ぶ南北方向、それに直行する形でXII-46杭とX-49杭を結ぶ東西方向にとった。セクション・ベルトは、南北方向は東側に50cm、東西方向は北側に50cmとした。発掘区は立木や西側の崖線等を考慮し、XIV-52・XIV-48・XII-46・VIII-46・VIとVIIの間-47・VI-48・VIII-51・XII-52の各杭を結ぶ部分とした(Fig.59)。これによって南東区、南西区、北東区、北西区の4区が設定され、表土層の除去から作業を開始した。

住居跡内中央部付近では前述の竪穴内I層～IV層の基本層序が確認され、このIV層の直下で貼床が認められた。

コの字形の粘土貼床の方向が把握され、当初推定していた竪穴の長軸方向がずれて北西-南東をとることが判明し、壁沿いに並列すると考えられる炭化材列が確認された。その検出に時間を要すると判断し、重要な骨塚の推定位置を南東区と考え、本年度の調査はその南東区を発掘せずに来年度に残すことに決定した。竪穴の上屋構造を知ることができる炭化材列は、住居跡の北西側半分にのみ残存していたが、それは南東側が完全に焼失したことを物語っているのであろう。炭化材列の中で注目すべきものは、おそらく本竪穴の壁材であったと考えられるものである(PL.23-1～2、PL.24-1～2)。すなわち壁の下端から10～20cmほど内側に見られた構造であるが、推定直径が20cmほどの丸太の外皮部分を厚さ3cmほどにカットしたものを、外皮側を竪穴の内部に向けて立て並べている様子が認められた。床面からの高さは20cmほどを測った。さらにその外側には、7号竪穴と同様に樹皮が検出されたが、壁材を壁土から保護する目的と考えられる。また、部分的にしか残存していなかったが、この加工丸太のそれぞれ壁材の接点の内側には直径数cmの丸太が立てられていることも確認できた。これらの竪穴内部側には、部分的にはあるが、幅30～40cmの板材がほとんど水平に置かれており、その出土状況からベッド状構造体の存在が考えられた。ただし、その板材の方向は竪穴の壁に平行する部分と直行する部分があり、疑問が残る点でもある。またそれらの一部は床面に直接乗っていた。

貼床の外回りには周溝が部分的に観察されたが、調査は来年度に残した。同様に柱穴と思われるものも本年度は発掘せずに残した。

コの字形貼床は、焼失住居ということもあって真っ赤に焼けて煉瓦状になっていたが、内側部分はややボロボロの状態であった。開口部は北西側にあるが、崖に面する方向である。さらにこの外側に南西区と北西区において別の貼床と思われるものの一部が確認されている。すなわち旧貼床が検出されたことになる。ただし、両者の高さはほとんど同一レベルであった。

炉跡は、竪穴中央部に盗掘とみられる攪乱によって一部が欠損していたが、竪穴の長軸に沿う貼床の内側に大型の焼けた礫が数個検出され、これが石組み炉と認識された。

骨塚は、未発掘の南東区に存在すると考えたが、発掘区の北西区においても発掘区の外側に続く状態で骨の集中が見られ、おそらく竪穴の長軸の先端すなわち崖側にも小規模の骨塚を形成していたと考え、次年度に調査を残すことにした。

なお、北西区の炭化材列の内側でクルミやヒシの実などが検出されたので、その付近の土壌サンプルを採集し、フローテーション分析を実施することにした。

本年度は以上の作業を終えた時点で調査を中断し、土嚢袋等を用いて保護手当を施した後にシートで全面を覆い、次年度に調査を継続することにした。

2001 年度

8号竪穴

前年度完掘できなかった8号竪穴について継続調査を実施した。保護用シートや土嚢を撤去した後、まずは掘り残してあった全体の約1/4（前年度の南東区に相当）の部分の掘り下げから開始した。ここでは骨塚が検出された（PL.25-1～2、PL.26-1）が、規模は7号竪穴のものほどは大きくならないことが予測された。同時に北西側の崖に面する部分の発掘区を拡張してみたが、前年度すでに確認されていた小さな骨塚が、北西コーナーよりやや東寄りに位置して全体がとらえられた（PL.26-2）。そのすぐ外側には炭化材列が検出され、炭化材列に混入した形で骨製クックルケシ状のものや骨製小札等も出土した。炭化材列は、7号竪穴と同様に丸太の半割材の外側に樹皮が添えられているのが基本のようであった。それらの下からは周溝が検出されている。また、北西のコーナー部分は崖の傾斜に沿って低くなっていき、壁の立ち上がりは検出が困難であった。基本的に壁際には周溝が走り、それらには炭化材が残っていることが多かったので、竪穴の壁には板材等を立てていたと考えられる。

炉跡は、昨年検出された石組みですべてであったが、西側部分は盗掘坑とみられる穴によって攪乱されていた。炉内の焼土はフローテーション用にサンプリングしておいた。

貼床は、南東の骨塚の前面に相当する部分に攪乱が見られ、その部分が一部消失していた。おそらくこれも盗掘によるものと推定された。貼床の周囲にも一部で周溝と炭化材が残っているのが認められた。

すでに前年度に確認されていたことだが、貼床については、「コ」の字形を呈する貼床の外側に、ほぼ同一の高さで、より古い段階と見られる別の貼床が検出されていた。この点からすると8号竪穴にも

第一章 調査の経緯

新旧の段階が存在したことは確実とみられたため、建て替えの痕跡を精査したところ、壁際に確認されていた周溝とほぼ重なるかたちで、古い段階のものとみられる周溝がより深い位置に検出された。さらに、炉跡のすぐ北西側の貼床の開口部で、住居跡の床面より若干低いレベルで礫群が検出された(PL.27-1)。この礫群は土坑状のものを伴うようであったが、検出面を確認したのみで土坑部分の掘り下げは行わなかった。これも8号竪穴の古い段階に伴う遺構と判断された。以上のように8号竪穴には、壁の位置を大きく変更しないかたちでの改築が想定された。本報告書の遺構各説の説明の中では、新しい段階を「8号竪穴」、古い段階を「8号竪穴古段階」として報告している。

本年度は以上の作業を終えた時点で8号竪穴の調査を中断し、特に貼床の開口部付近で確認された古い段階の遺構については次年度に調査を継続することとした。

9号竪穴

2001年度は、7号・8号竪穴の南東部およそ30mのところの位置する9号竪穴も調査の対象とした。調査期間中には完掘できないことを承知の上で、二次堆積土や表土層を剥いで次年度の発掘に備えようというものである。

発掘区の設定は、過去の測量図(駒井編1964:Fig.5)に記された大型の窪みの位置に発掘区を設定した。この地点には過去の測量後に二次堆積土が積み上げられたため、現地表面では窪みが確認できない状況であった。調査グリッドはX-31杭を基準にしてX-33杭を設定し、33ラインのXV、XX、XXIV、さらにXX-33杭からXXラインの29、30、31、35、37に杭打ちを行い、竪穴のほぼ中央部を通ると考えられる33ラインとXXラインをセクション・ラインとする方針とした(Fig.97)。

まず、XXラインの北西側と33ラインの北東側にサブ・トレンチを入れ、次いで発掘区全体の表土剥ぎを行った。北西側のサブ・トレンチおよびその周辺で表土すぐ下のレベルでヒグマ等の骨の集中が検出され、オホーツク文化期の組合せ釣針や銚先が出土したが、この時点ではオホーツク文化期の骨塚のような印象を受けた。竪穴に伴うものかどうかは本年度の段階では確認できなかったが、次年度の調査で竪穴床面よりもかなり高い位置にあることが確認され、最終的に竪穴には伴わないものと判断された。

四分割した北東区と北西区のⅡ層の黒褐色土層、Ⅲ層の暗褐色土層を掘り下げると、その下には樽前a火山灰(Ta-a、1739年降灰)と見られる白色火山灰層が薄く堆積していた。その下部はⅣ層の色調のやや明るい暗褐色土層となり、北東サブ・トレンチでは貼床の一部が検出された。その外側では炭化材列が見られ、壁の一部と周溝が確認されている。ただし壁のラインは2本見られたので、この時点でこの竪穴にも建て直しが少なくとも2回あったことが想定された。北東区のⅢ層からはオットセイ・アザラシ他の海獣骨が集中する箇所があったり、Ⅲ層からⅣ層にかけて魚骨の集中地点があったりしている。またⅣ層からはオホーツク期の骨製の釣針や針入が出土している。なお、底部を欠くが縄文中期の北筒式トコロ6類土器の復元可能な個体が北東区の外側壁ラインに落ち込むような形でⅡ層中に見られたが、どのような状況でその状態になったのかは不明である。

9号竪穴については以上の段階で本年度の調査を中断し、セクション・ベルトを保護するためにベル

トの脇に土嚢袋を積み、全体をシートで覆って保護し、次年度に調査を継続することとした。

2002年度

8号竪穴

8号竪穴については、前年度に貼床開口部付近で検出された古い段階の遺構について詳細を確認するため、この付近の区域に対してのみ調査を実施した。昨年度に確認された礫群の周辺を精査したところ、8号竪穴の床面より低いレベルで10基の土坑群が検出された（Fig.63）。そのうちの一部は8号竪穴の貼床の下面にまで広がっていたので、貼床の一部を除去して土坑の平面プランを確認して記録した。これら土坑群のうち、中央部にあって土坑内に炭化材が検出された1基（PL.27-2）については掘り下げを行ったが、他のものについては上面プランの確認のみにとどめ、掘り下げは行わないことにした。以上の作業をもって8号竪穴の調査は終了した。

9号竪穴

9号竪穴については保護用のシートや土嚢袋を撤去した後、発掘区全体を4分割した各区について掘り下げを継続したところ、北東区と南西区のⅢ層中に礫群の集中が認められた。住居跡の壁付近と思われる部分から各区で炭化材列が検出され、それが2列存在することが次第に明らかになってきた（PL.33-1～2）。樹皮を伴う炭化材も見られた。貼床の一部や床面の一括土器等が検出され始めた段階で、土層断面図を作成するため、サブ・トレンチを入れる等の作業を進めた。土層断面図を作成した後はベルトを除去して全体の掘り下げを行ったが、中央部には角礫を四角く配した石組み炉の跡が検出された（PL.34-2）。そのすぐ南側には木枠を方形に配した炉跡が認められている。

炭化材列は部分的には保存が良かったが、全てを残すことは無理と判断し、平板に記録する方法をとった。その炭化材列の並びから判断して、長軸は北北西－南南東で粘土貼床の開口部は北側にあることが判明し、南側の壁近くには焼けた獣骨片のまとまりがあり、それを骨塚と判断することができた。骨塚部分には基本的に50cmメッシュの枠を被せ、微細図をとりながらメッシュ毎の取り上げを行った。

2列の炭化材列を除去していくと、その下部に周溝が検出され始めたが、それは基本的に3列あることが分かり、外側から仮称周溝a、同b、同cと命名した。貼床も全面には明確に検出されなかったが、北側では3枚あることが分かり、それも仮称貼床a、同b、同cと名付けた。また貼床の検出を行う過程で、その外側部分の一部で周溝が確認されたので、それらを仮称周溝d（Fig.101上、9a号の「想定される貼床のライン」の破線）、同e（Fig.101下、9b号の「想定される貼床のライン」の破線）と呼ぶことにした。以上の周溝と貼床の状況から、9号竪穴は基本的に3回の建て替え（入れ子状の縮小）が行われたと最終的に判断された。本報告書の遺構各節の説明の中では、仮称周溝aと仮称貼床aを9a号竪穴、仮称周溝bと仮称貼床bを9b号竪穴、仮称周溝cと仮称貼床cを9c号竪穴に伴う段階のものとして、それぞれ報告している。仮称周溝dについては9a号の貼床の、仮称周溝eについては9b号の貼床の、それぞれ周囲に設けられた木枠を収めていた溝である可能性が高いと推測されたが、確証は得られなかった。

第一章 調査の経緯

竪穴長軸の北側の頂点には太い支柱穴が見られたが、そのすぐ東側にはやや太い柱穴が3本×3列のような形で検出され、おそらく出入口用のものと考えるのが妥当であろうと思われた(PL.36-1)。

骨塚を掘り下げていくと、最終的にはやや保存の良いヒグマの頭骨が竪穴の内側に顔を向けて1体置かれ、その傍には小型の土器が1個横たえられていた(PL.35-1～2)。この骨塚の外側にも別の小骨塚が出現し、獣骨が残っていたが、それは板状のものの上に置かれていたような痕跡を伴っていた(PL.32-2)。最終的に、前者の骨塚は9c号竪穴に、後者の骨塚は9a号竪穴に伴うものと判断された。

なお、9号竪穴の東側の壁の外側において、9a号竪穴の壁にほぼ接しながら併行するようなかたちで何らかの遺構の存在を示すような痕跡が認められた。9a号竪穴の外回りに古い段階の竪穴がもう一軒存在する可能性も考えられたが、痕跡が不明瞭であったこともあり、これについてはそれ以上の調査を行わなかった。

遺構全体の測量と写真撮影を行ったのち、全体にシートをかけて遺構面を保護し、9号竪穴の調査を終了した。また本年度は、9号竪穴の調査撤収作業と併行して7号竪穴と8号竪穴の埋め戻し作業も行っている。

2003年度

前述のように2002年度にトコロチャシ跡遺跡群が史跡常呂遺跡に追加指定されたことを踏まえ、本年度からは調査目的を史跡整備事業に伴う調査へと変更し、旧常呂町(現北見市)の主導のもと、旧常呂町と東京大学が協力する体制で調査を継続することとした。

史跡整備事業の目的の一つにオホーツク文化の竪穴住居の復元がある。史跡整備専門委員会の意向としては前年度までに調査を完了した9号竪穴が有力候補となったが、より一層の情報が必要と判断されたため、さらにもう1軒の竪穴を調査することとした。

調査対象については、集落全体の様相を把握するため、集落の端、すなわち過去の測量図(駒井編1964: Fig.5)に記された窪みのなかのもっとも南側に位置する竪穴を10号竪穴として調査の対象とした。この窪みも現状ではすでに耕作等によって平坦化され、その痕跡は全く不明であったが、測量図から位置を推定して調査区を設定した。調査グリッドはX-31杭とX-52杭を基準とし、X-44杭を設定してトータル・ステーションによる遺物取り上げの原点とした。次にXXV・XXVI-42～45区に調査区を設定し、44ラインから東側に50cmのセクション・ベルトを残した。続いてXXV・XXVI-40・41区、さらにXXIII・XXIV-44・45区とXXIII・XXIV-42・43区を設定し、44ラインの東側とXXVラインの北側50cmをセクション・ラインとして残すこととした。二次堆積の耕作土を除去していくうちに竪穴の輪郭が少しずつ見え始め、これらの発掘区の西側と南側に竪穴が広がることが予測されたが、本年度は日程的な制約からこの発掘区内だけの調査にして、残る部分は次年度に広げて調査することとした。

10号竪穴内では前述の基本層序のI～IV層が確認されたが、II層中には樽前a(Ta-a、1739年降灰)と見られる白色の火山灰が部分的に薄く堆積していた。また、IV層の直下が竪穴の床面となっていた。

壁付近と想定される部分から、各区で炭化材列が少しずつ現れ、貼床の一部も検出されてきたが、南側では床直上部からの土器の一括資料も出土した（PL.42-1）。また北側では骨の集中部（Fig.143）も検出され、炉跡や周溝の一部も確認できるようになった。北側では竪穴長軸の頂点が炭化材で検出されたが、少し離れて炭化材列は2列存在することも把握できた。

セクション・ベルト沿いにサブ・トレンチを入れながら調査を進め、南北の44ラインと東西のX X Vラインより北側50cmラインのセクションをとり、発掘区の南端のX X VIIラインもセクション図を作成しておいた。ベルトを除去した結果、検出されていた石組みの炉跡（Fig.129の炉cに相当、PL.44-1）はより北側に位置していた古い石組み炉跡（Fig.129の炉bに相当）を壊して新しく作ったものであることが判明した。炉跡の南側では、床面上に礫群等が集中する地点も確認された（Fig.144、PL.43-2）。貼床も遺存は部分的であったが、利用時期を3段階に分けられる状況であることが判明し、周溝も複数確認された。このような点から、10号竪穴も複数回の建て替えがあった可能性が高いことが把握された。竪穴の北側部分では床面上の海獣骨等の遺物が豊富で、調査に時間がかかるとみられたため、精査は次年度に持ち越すことにし、測量と全体の写真撮影を行って、今年度の調査を終了することにした。土嚢袋を利用して必要部分を保護し、全体にシートを被せている。

2004年度

前年度に続き10号竪穴の調査を実施した。本年度の調査も史跡整備事業に伴う調査であり、旧常呂町の主導のもと、東京大学が協力する体制で調査が行われた。

前年度は住居跡の北側半分を調査していたが、今年度は住居跡の南側半分も調査対象とすることにして発掘区を拡張した。調査区の設定にあたってはX -31 杭とX -52 杭からX -44 杭、X X -44 杭をまず設定し、これらの杭を基準に昨年度発掘区から西側に2m（X X VIIラインのみ西に1m）、南側は41ラインから46ラインの間を2m（41ラインは南に1m、46ラインは南に1.5m）拡張し、当初の発掘区を設定した。耕作土および2次堆積土を除去していくに従って竪穴の輪郭が少しずつ現れ始め、竪穴の南側部分は当初設定した発掘区外にまで延びていることが判明したので、42ラインから45ライン西側50cmの間で発掘区を0.7m～2m拡張した。さらに、竪穴住居址北壁の外側に住居跡が延びていないかを確認するために、X X III -44 から44ラインに沿って北側2mに、幅50cmのサブ・トレンチを44ライン東側に設定して確認するとともに、X X III -42 からX X III -46 までの間を50cm拡張した。以上が本年度の発掘区である（Fig.129）。竪穴内の土層断面図は前年度から連続させて、44ライン、X X Vラインの北側50cm、X X VIIラインで作成した。

床面近くまで発掘区内の掘り下げを行うに従い、竪穴南側でも炭化材列が2列残っていることが確認され、竪穴南側でも住居の建て替えが行われていたことがまず判明した。この外側炭化材列の壁際中央付近では焼けた骨片のまとまりが、内側炭化材列の壁際中央付近では焼けた骨片とオホーツク貼付文系土器および北筒式トコロ5類土器のまとまりが確認された。これらは外側・内側の炭化材列にそれぞれ伴うとみられる骨塚と思われたが、時間の関係で確認のみにとどめた。内側の骨塚の範囲には50cmの

第一章 調査の経緯

メッシュで調査グリッドを設定し、骨塚表面を精査して骨塚の広がりを確認した。外側の骨塚に関しては、本年度は44ライン東側のサブ・トレンチ内での確認のみで、調査は次年度以降におこなうこととした。

竪穴南側床面では焼けた粘土貼床が確認されたが、この貼床は奥壁のラインと並行する3列～4列の周溝によって切られていた。床面上では、XXVIII-44グリッド付近とXXVII-42グリッド付近で両者ともオホーツク貼付文系土器がまとまって出土した。それぞれ外側炭化材列・内側炭化材列の時期を示すと判断された。さらに、このXXVIII-44グリッド出土の土器集中が周溝（Fig.133上の「推定される貼床a'のライン」とした破線部分）内に落ち込んでいたことから、この時点ではこの周溝が最も古い時期の竪穴の壁に相当すると判断し、この周溝の段階を仮称10a号、外側炭化材列の段階を仮称10b号、内側炭化材列の段階を仮称10c号とする3段階の建て替えを想定した。（このうち、仮称10a号と仮称10b号については、上記の理解が誤っていたことが次年度の調査で判明している。詳細は後述する。）

竪穴西側では、前年度に一部が確認されていた2列の炭化材列の延長を確認していったが、いずれの炭化材列も竪穴開口部側のもっとも外側の壁とはつながらず、途中（XXV-46グリッド付近）で切れていた。これらの炭化材列は範囲確認のみで完掘していない。さらにこの2列の炭化材の内側には、炭化材に沿って南北に延びる周溝が確認された。この周溝が、竪穴開口部側のもっとも外側の壁とつながるらしいことが確認面から推測されたが、本年度調査では周溝を完掘しなかったため、本年度の時点では確定できなかった。

竪穴北側（開口部側）に設定したサブ・トレンチでは、前年度確認した竪穴最北側の壁の、さらに外側について調査したが、竪穴がさらに外側に広がっている状況は確認できなかった。

本年度発掘区の調査は、骨塚および炭化材列周辺の土を掘り残しながら進められ、最終的に床面の一部まで発掘が進められたが、床面全面の精査、周溝内の掘り下げ、骨塚や炭化材列の調査、住居跡の「掘り方」の確認等は行わず、これらは次年度の課題として残した。そして全体の測量と写真撮影を行って調査を終了した。調査区内で保護が必要な部分は土嚢袋で養生し、全体にシートを被せている。

2005年度

前年度に続き、史跡整備事業に伴う調査として前年度同様の体制で調査を実施した。前年度までの段階で、骨塚と炭化材列部分以外は床面近くまで調査が進んでおり、本年度の調査対象として残されていたのは、骨塚と炭化材列、床面の精査、住居の掘り方・周溝・柱穴の調査である。

炭化材列の調査については、遺存状態が良好なため掘り残してあった竪穴の西壁と南壁から発掘を開始した。調査の結果、西壁では炭化材列が3列確認され、本住居跡は3回以上の建て替えを経ていることが確実にされた。西壁における一番外側の炭化材列が南壁の最も外側の住居跡の壁に続くことは、攪乱による一部断絶があるものの確実と考えられた。また西壁における一番内側の炭化材列については、南壁側では最も遺存状態の良い一番内側の炭化材列、北壁側でも最も内側の炭化材列に続くことは、遺存状況から判断して確実であった。他に、南壁の最も外側部分、北壁の最も外側部分、東壁の一部など

でも炭化材列が部分的に確認された。

炭化材列の組み合わせ、すなわち住居の壁の構造に関しては、7号～9号住居と同様の様相が確認された。具体的には、遺存状態の良い部分において、外側の壁に接する部分に樹皮を当て、その内側に板材ないし丸太の1/4程度の割材（平坦面を外側に向ける）を縦方向に立てて並べて壁の構造としている状態が検出された。

炭化材列の除去後、壁の周溝の延長や切り合い等を確認することにより、住居の切り合い関係を確定した。最も古い段階と判断されたのが前年度の仮称10b号（Fig.133上の10a号）で、西壁・南壁・東壁に残る最も外側の炭化材列を結んだ線とその延長線を壁とする段階である。次の段階が仮称10a号（Fig.133下の10b号）となる。西壁に3列残されていた炭化材列のうちの中央の列の延長が、北側の最も外側の炭化材列に繋がる可能性が高い点、東側にも3列残されていた炭化材列のうちの中央の列の延長が、南東隅でFig.133下のように屈曲して南側の壁となる周溝に繋がっている点などから、Fig.133下のような形状の住居が存在した段階を想定した。最後の段階が仮称10c号（Fig.134の10c号）で、最も内側の炭化材列を壁とする段階である。なお、前年度の仮称を踏襲したため、本年度においても調査時には最も古い段階を仮称10b号、次を仮称10a号と呼称して記録していたが、本報告では住居の構築順を重視し、前者を10a号、後者を10b号として報告している。

骨塚については、昨年度確認されていた内側（口絵Front 2-2）と外側（PL.41-1～2）、両方の骨塚を調査した。骨塚中の土は水洗選別とフローテーション用に全て回収した。外側については、骨塚の下面に粘土が敷かれていた状況が確認されている。

粘土の貼床については遺存状況が悪く、住居の北側と南側で焼けた状態の貼床が一部確認されたのみで、住居の中央部分では粘土が貼られている状況は明瞭には確認できなかった。竪穴の北側の貼床と南側の貼床の一部は、仮称10c号の壁を構築する際に破壊されている状況が確認された。柱穴については、仮称10c号の支柱穴と見られるピットが同竪穴の長軸上両端で確認されたほか、仮称10a号奥壁側にも支柱穴と見られるピットも確認された。

炉については、一昨年度、竪穴長軸上に並んで2ヶ所の石組みの炉跡が確認されていたが、今年度は南側の炉の東側に、それら2ヶ所より古いとみられる石組み炉の痕跡が新たに確認された。

以上、本年度で10号竪穴はほぼ完掘し、住居跡の測量と写真撮影を行って調査を終了した。調査後、周溝・ピット・炉など保護が必要な部分は土嚢袋で養生し、全体にシートをかぶせて保護した。

（宇田川洋・熊木俊朗）

第三節 出土資料の掲載について

上述した 1998 年度～ 2005 年度の発掘調査においては多数の遺物が出土したが、本報告書に全ての遺物を掲載することは、紙幅の都合もあってかなわなかった。よって、本報告書では出土遺物について以下のような選別をおこなって掲載した。

土器

竪穴の床面と骨塚出土土器については、全体の個体数を把握できるよう、できるだけ多くの資料を掲載するように努めた。具体的には、床面と骨塚出土の完形土器と口縁部破片、底部破片については細片を除き全ての型式の全点を掲載している。床面と骨塚出土の胴部破片については、以下のような選別をおこなった。オホーツク土器のうちの文様を有する個体についてはやはり細片を除き全点を掲載した。オホーツク土器の無文の胴部破片については、器形復元が可能なもののみを掲載してそれ以外は省略した。オホーツク土器以外の土器型式の胴部破片については、多くを省略して各型式の中から代表的なものを選別したが、出土した型式の種類には遺漏がないように留意した。

竪穴の埋土や竪穴外から出土した資料については、器形復元されたオホーツク土器のみを掲載し、他の資料は全て省略した。今回省略した埋土や竪穴外の出土土器については、後日あらためて報告する予定である。

以上の土器を第二章では遺構（竪穴の建て替えの各段階）毎に分けて掲載している。異なる遺構（10b 号床面と 10c 号床面など）から出土した資料が接合した場合は、原則的には最も新しい段階の遺構に伴うものとして扱っているが例外もあり、個々の資料の出土状況に応じて帰属を判断している。また、床面と埋土の出土遺物が接合した例については、一部の例外を除き、床面出土資料として扱っている。また、オホーツク土器については文様を基準とした分類をおこなった上で掲載しているが、この分類は熊本によるもの（熊本 2001、熊本 2009）を基本としている。

石器

基本的に、竪穴の床面と骨塚で出土位置を計測された遺物（点取り遺物）を、遺構（竪穴の建て替えの各段階）毎に分けて掲載した。これらの掲載石器は、剥片・細破片を除いた道具類（ツール）や石核の主なものを網羅できるように努めた。

それ以外の石器（埋土出土やフローテーションによる検出）も同様に掲載しているが、その場合には出土状況について言及している。

骨角器

竪穴の床面と骨塚出土骨角器については、できる多くの資料を掲載するように努めた。器種分類が可能な資料については基本的に全点を掲載した。ただし板状製品・棒状製品等としたものについては加工が進んでいるものを中心に掲載し、原材や残片だと考えられる資料については特徴的なものを除いて省略した。また動物意匠の彫刻とクックルケシ状の垂飾を中心に埋土出土のものも掲載した。それ以外の

埋土出土資料は基本的に省略したが、特に骨塚や炭化材列の周辺では埋土出土として取り上げた中にも遺構に伴ったと考えるべき資料が含まれている。これらの資料については、後日改めて報告をおこなう予定である。

木製品

木製品については、完形のものや器種がある程度判別できるものは出土層位にかかわらず全て掲載し、器種が判別できない破片資料については省略した。掲載は図版の煩雑さを避けるために各遺構（竪穴の建て替えの各段階）別ではなく竪穴毎に一括しておこない、概ね器種別にまとめている。ほぼ全ての木製品は火を受けて炭化しており、これは竪穴廃絶時に被熱したためと考えられるが、このことは即ち、木製品については各竪穴の建て替え毎に廃棄の同時性が認定できることを示している。以上の考え方に従うならば、竪穴の埋土から出土した木製品、特に竪穴内IV層出土の資料については各遺構に伴うものと考えてよいこととなる。

金属器

他の材質の遺物と異なり、金属器（青銅製品と鉄製品）の出土数は少ない。そのため、竪穴の床面や骨塚出土の遺物は全点を、そして埋土から出土した遺物も図示できるものをすべて掲載した。本章第一節にあるように、トコロチャシ跡遺跡はアイヌ文化の遺跡でもあるため、本書で報告するオホーツク文化の竪穴の埋土からアイヌ文化期の金属器も出土している。竪穴の埋土を利用した活動を考える上で重要であると判断し、小札の再加工品や鉄鍋なども埋土出土の遺物として併せて掲載している。

金属器の遺存状態は総じて良好であり、また愛媛大学にてX線写真撮影を行い、実測・墨入れを行っている。掲載にあたっては、各図版の煩雑さを避けるために竪穴の建て替えの段階ごとでは無く、竪穴ごとを一括して行っている。

(熊木俊朗・山田哲・高橋健・笹田朋孝)

引用文献

- 熊木俊朗 2001 「第三章第二節 1-2 オホーツク土器」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科：84-98
- 熊木俊朗 2009 「第6章第1節 1 オホーツク土器の編年と各遺構の時期について」『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会：303-319